

審査の結果の要旨

氏名 宮下光令

本研究は、日本における望ましい死の概念化と共通性を定量的に評価することを目的とし、一般集団および緩和ケア病棟の遺族に対して、大規模な横断調査を行ったものであり、以下の結果を得ている。

1. 日本における望ましい死は、『身体的、心理的な苦痛がないこと』、『望んだ場所で過ごすこと』、『医療スタッフとの良好な関係』、『希望をもって生きること』、『他者の負担にならないこと』、『家族との良好な関係』、『自立していること』、『落ち着いた環境で過ごすこと』、『人として尊重されること』、『人生を全うしたと感じられること』、『自然なかたちで亡くなること』、『他人に感謝し、心の準備ができること』、『役割を果たせること』、『納得するまでがんと闘うこと』、『自尊心を保つこと』、『残された時間を知り、準備をすること』、『死を意識しないで過ごすこと』、『信仰をもつこと』の18の構成概念に概念化された。

2. 共通性が高い望ましい死の構成概念は『身体的、心理的な苦痛がないこと』、『望んだ場所で過ごすこと』、『医療スタッフとの良好な関係』、『希望をもって生きること』、『他者の負担にならないこと』、『家族との良好な関係』、『自立していること』、『落ち着いた環境で過ごすこと』、『人として尊重されること』、『人生を全うしたと感じられること』であった。やや共通性が高い望ましい死の構成概念は『自然なかたちで亡くなること』、『他人に感謝し、心の準備ができること』、『役割を果たせること』、『死を意識しないで過ごすこと』、であった。相対的に共通性が低い、望ましい死の構成概念は『納得するまでがんと闘うこと』、『自尊心を保つこと』、『残された時間を知り、準備をすること』、『信仰をもつこ

と』であった。

3. 一般集団と緩和ケア病棟の遺族では、望ましい死の構成概念の平均得点には臨床的に有意な差はなかった。『死を意識しないで過ごすこと』と年齢など、いくつかの望ましい死の構成概念の平均得点と背景要因には臨床的に有意な差があった。日本人に特徴的な死に対する態度として3つの表現、「眠るようにさいごを迎えること」、「ぼっくりとさいごを迎えること」、「医師におまかせすること」と望ましい死の構成概念は一部に関連が認められた。

以上、本論文はわが国における望ましい死の構成概念をはじめて明らかにし、また、その共通性について定量的に評価した。本研究はわが国の緩和ケアのあり方を定量的研究方法によって明確に示したものである。本研究の結果は緩和ケアにおける対象理解、患者・家族と医療者のコミュニケーションおよび治療・看護のあり方に示唆を与えるものであり、さらに、この結果を応用して、今後、わが国の緩和ケアの評価を行うことが可能になると考えられる。このように、本研究はわが国の緩和ケアの分野に重要な貢献をなすものと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。